

てくる。不満や憤り、怖れ、憎しみなどの感情を歌った作品が多く
なってくるのである。

しかし、全歌集をみた時、やはり自然詠の占める数は大きい。

『往還集』後の自然詠が生活のにおいがするにしても、その根底を
変ることなく流れているのは、やはり『ふゆくさ』の清純さやみず
みずしさなではなからうか。そして、それは文明氏の自然への親し
み、自然に対する素直な感動からくるものであると思われる。『往
還集』や『山谷集』の冷酷、非情と思えるほどのリアルな題材、感
情の作品は時代が、文明氏にそうさせたのであり、それはひとつの
虚勢とも考えられるのである。文明氏の本質的なものは、『ふゆく
さ』の清純さであり、そういう気分を表出するところに文明氏の抒
情の質の特色があるのではあるまいか。

「わがひとに与ふる哀歌」論

——その悲劇性の追求——

序

詩人、伊東静雄——彼の詩における悲劇性は、彼自身の心の悲劇性
と同時に時代の制約からくる悲劇性もあわせてもっている。伊東の
詩は、彼のことを借りれば「いろんな事実をかくして」書いてあ
るので「悲惨なできごと」という程度にしかいえない。しかし事実

(Ⅲ) 文明とリアリズム

(紙面の都合上省略)

(注)

1. 文明歌集。古今書院。大正14出版
2. 晶子歌集。岩波文庫。明治37出版
3. 岡山巖著『現代歌人論』より引用
4. 文明歌集。角川書店。昭和30出版
5. 文明歌論。角川書店。昭和41出版
6. 正岡子規歌論。改造社。昭和3出版
7. 子規著「俳人蕪村」。改造社。昭和3出版の中より引用
8. 『現代短歌全集』創元社。昭和28出版の中より引用
9. 文明歌集。角川書店。昭和30出版

森 田 祥 子

は隠されていても伊東においては「ついでがあつたら君は新聞にか
う書いてくれ給へ／あの男は日記と書信の外はヴェルケを信じてな
いって」日記と書信の外は信じないとする態度、つまりあつたこ
と、事実しか作品とみない態度、「客観的な手法的なその作曲態度
は私には縁が遠いのです。」作曲者シャルパンティエを評すること
ばにみられる詭物的な態度ではなく、主観を基としたものでなけれ

ばならないとする態度があるので、その作品の背後に潜む事物をとりえ、彼の詩における悲劇性をさぐってみたい。そしてその作品に悲劇性をもたらす伊東自身の心の悲劇性と、それを培ったものが何であるかを解明していきたい。参考資料としては「伊東静雄全集」(全一卷)を用いて「わがひとと与ふる哀歌」が、昭和十年十月に出版されたことからして昭和十年十月までに書かれた詩、七八編(「わがひとと与ふる哀歌」二八編、拾遺詩五十編)と同じ時期までの散文、書簡を中心として論を進めていきたい。

一、詩作品上での悲劇性

1、詩の表層上での悲劇性

「わがひとと与ふる哀歌」に収められている詩と、拾遺詩編にでてくる「わがひと」に関することばを書き抜いてみると、

「私の放浪する半身、愛される人」「命ぜられてある人、私の放浪する半身」(「晴れた日に」)、「昔の私の恋人」(「私は強ひられる」)、「死んだ女」(「田舎道にて」)、「私が愛しそのため私につらいひと」(「冷めたい場所」)、「わがひと」(「わがひとと与ふる哀歌」)、「月光の窓の恋人」(「有明海の思ひ出」)、「かの味気なき微笑のひと」(「かの微笑のひとを呼ばむ」)、「わが去らしめしひと」(「わがひとのかなしき声」)、「行ってお前のその憂愁の深さのほどに」以上「わがひとと与ふる哀歌」より▽

「あの女が私の曾て／雲の様に去らせた女」(「懼」)、「彼女」(「四月」)以上「拾遺詩編」より▽である。
ここにてでてくることは、それは時間的には、「昔の」「曾ての」

「死んだ」という「わがひと」であり作中の私にとっては、「放浪する半身」であり「わがひと」「彼女」であっても、その人は「私につらい」「味気ない微笑」をする「雲の様に去らせた女」なのである。ここで「わがひと」を現在の時点で歌われないこと、過去に葬ってしまったことに正常の恋ではないものを感じると共に、作中の私にはつれなかつた恋人らしいことがわかってくる。いうなれば、一方的に終わった悲恋らしいことが感じられる。又、冒頭の詩、「晴れた日に」が、哀歌の所以を表明しているとみると、そこにも片恋に終わった青春の恋が読みとられる。

こうみれば「わがひとと与ふる哀歌」には、片恋故の悲劇感が流れているととれないこともない。片恋に終わった恋であったので、詩、「わがひとと与ふる哀歌」において「私たち」と「他」を区別している認識が、詩、「田舎道にて」にみられる「私たち」も個々に分離していると歌うに至るのである。又、「わがひと」を荒々しい現実界の場所に置くに至るのである。

「わがひとと与ふる哀歌」は一種の恋愛詩集でもあるので、以上述べたような片恋故の悲劇性をもっていることは否定できない。しかしそれは詩の表層の部分にのみ表われた、外見的な悲劇性でしかなく、彼の詩における悲劇性は片恋という、いわば現実的事実のみを描出したことにあるのではない。そのことを第二節において述べることとする。

2、詩に潜む悲劇性

「全く純粹に客観的な叙景詠物詩の如く見えても、その奥には深き主観の裏付けがある。」とその卒業論文において述べた伊東は抒情詩人であった。「主観の裏付けのある詩」には、詩を書かせた何

らかの衝動があるものである。伊東の場合、その書かせた衝動の一つに「故郷」に対する意識があることはいなめない。

伊東の詩には一連の「故郷」に対する詩がある。「曠野の歌」「帰郷者」「有明海の思ひ出」等がそうである。故郷、長崎県、諫早町にあって伊東の家は家宅数軒をもつめん問屋であった。父惣吉は、「友人といふものは、あれは私の生きている父だ／あそこには計画だけがあって／訓練が欠けてゐた」（「病院の患者の歌」）と歌われているように、計画性はかりがあつてそれをとりしきる才覚がなかった。つまり経営の才がなかった為に彼の生家は没落したのである。没落と同時に背負ひ込んだ莫大な借財を彼は律義にも一生かかつて返済することになる。長男でもない、四男にすぎない彼である。

この「故郷」を彼は一つは現実界のものとしてとらえる。

「町はずれの並樹の松に／お前の切な願ひに招かれて／まっ黒に鴉どもが集り／糞を落ち落し／お前にののしり叫ぶのを」（「追放と誘ひ」）、「自然は限りなく美しく永久に住民は貧窮してゐた」（「まったく！ いまは故郷に美しいものはない」）（「帰郷者」）

と、伊東自らの体験に基く伊東の現実的故郷を歌う。その故郷は、

「美しい故郷は／それが彼らの実に虚しい宿題であることを、無数な古来の詩の讚美が証明する」（「帰郷者」）

と現実の故郷をみつめた所に、故郷のむなしさを知ることとなる。そして

「誰もがこの願ふところに／住むことが許されるのではない」（「晴

れた日に」）

と故郷に対する断念を歌う一方、

「田舎を逃げた私が都会よ／どうしてお前に敢て安んじよう」（「帰郷者」反歌）、「汝恥知らずの詩人よ／あの時あの土地を去るには何がお前に欠けてゐたか／私はよく知つてゐる」（「追放と誘ひ」）と、

故郷に対する憧れも捨てきれないのである。

この現実の故郷を断念しながら、希求するという一見矛盾した「故郷感」が解決するのが「曠野の歌」である。この詩に歌われている自然は「木の実照り、泉はわらひ……」という明るい風景であり、その明るい故郷に詩人は帰ることができるといふのである。しかしその故郷には「時非ときひの木の実」が熟れていたのである。自分が種をまいた花が、そのまゝ自分の屍骸を曳く馬の道標となる風景を見たのである。ここでは「故郷」はもう現実の世界ではない。非時の世界である。非時の世界の故郷に帰ることが「永久の帰郷」であり、「わが痛き夢よこの時ぞ遂に／休らはむもの！」だといふのである。

現実の故郷を断念しつつ希求した伊東は、非時の故郷をあつらえているのである。「痛き夢」が休らう非時の故郷。もうそこには時間もないかわりに自分自身の現実の故郷での体験も、思いでも全て洗いおとされてしまつてゐる。故郷というものが、そういう個人的情趣のベールをはいでしまつた時、故郷は普遍的故郷の存在そのものとなるのである。

「故郷」が現実的具象でなくなつた時、それは詩人の思念や思考の形象となるのである。伊東の内部における思念や志向として「故

郷」を希求していることになるのである。

しかし伊東においては事物を普遍的なものに高めようとす態度は、故郷においてのみではない。伊東の詩に点在する「太陽」にしてもそうであるし、他の詩語もほとんどいい位、事物の普遍体である。伊東の詩に風景描写の皆無なのは、桑原武夫の指摘のとおりである。又、彼の詩語はほとんど修飾語を伴わずその詩の歌われている場所、季節、時刻も判然とはしない。伊東自らの生活の体験が普遍的に還元されている所以である。

伊東が「太陽」「故郷」そのものを希求するのは現実のそれらを知っていたからである。現実の事物を凝視してその底に潜むものを知っていたからである。私はそこに、覚めている者の目、透徹者の目を感じる。その目が冴えてどこまでも行き渡っているのを感じる時、私はその見えすぎる目に痛ましさを覚えるのである。余りに事物が見えすぎることは、余りに透徹した目で書いてある詩には、その厳しさ故の悲劇感がただようものである。

透徹者としての認識は、彼の詩におけるイロニー的表現からも窺うことができる。「行ってお前のその憂愁の深さのほどに／明るくかし処を彩れ」（「行ってお前のその憂愁の深さのほどに」）。この決然たるイロニーは、「寧ろ彼らが私のけふの日を歌ふ」に示されることになる。

「耀かしかつた短い日のことを／ひとびとは歌ふ／ひとびとの思ひ出の中で／それらの日は絞く／いい時と場所とを選んだのだ／私はずたはない／短かかつた耀かしい日のことを／寧ろ彼らも私のけふの日を歌ふ」

思い出を拒絶しなければならなかつた伊東の鋭い目を感じると同

時に、イロニー的表現しかできない伊東に慄然とさせられる詩である。

物が見えずぎて、イロニー的表現しかできない時、自分自身しかクセニエを寄せることができない時、陥る所は孤独である。伊東は詩人として自らの孤独性を高らかに歌い上げている。それは秧鶏は飛ばずに全路を歩いてくる」に見られる、飛ばないで全行程をこつこつ歩いて帰らねばならない秧鶏に譬喩されている。伊東の孤独なる詩精神である。この詩精神が、すさまじいほどに歌いあげられているのが、第二詩集「夏花」中の詩である。

「運命？ きなり／あゝわれら自ら孤独なる発光体なり」（八月の石にすがりて）」

自らの運命を「きなり」いうことばで断定している激しさ、その運命は、ひっそりと孤独に、自分から光を発つ生き物にすぎないという自覚。この孤独なる詩精神は透徹者としての態度が一生を通じて変化しなかつたのと相応じて変化しない。それは伊東が生きている間中、透徹者としての目を持ち続け、孤独の世界に生きていたことを立証するものである。その孤独の中で伊東は「詩作を覚えた私が、行為よ／どうしてお前におかれなことがあろう。」（「帰郷者」反歌）とひたすら詩を創ることよってのみ自らの世界を確立する。詩作という行為は彼においては、「太陽」に象徴される生のかしともいえるものであったが、その「太陽」を希求の世界に輝かす作業は、まさに「わが痛き夢」であつたらう。この消そうとして消すことのできぬ「痛き夢」がただよっているが故に、私は「わがひとに与ふる哀歌」に悲劇性を感じるのである。「曠野の歌」における普遍的故郷に帰ることが、実に厳しい発想を支える現実

界を凝視する目がなくなることを意味することに思い至ると、安らうことのない、死によってしかもたらされることのない「痛き夢」を持ち続けた伊東が、悲劇的運命感の持ち主であったことが、わかってくる。

ではこのような詩を書いた、詩を書かざるをえなかった伊東の孤独の意識はどうして生れ、どのようにして確立されたのであるか。それは第二章以下に述べるように時代としての制約を最も多く受けている。と同時に伊東の生来の気質も多分に影響している。

まず時代の子としての伊東静雄を眺めてみることにしよう。

二、精神面での悲劇性

2、孤独の意識による悲劇性

昭和初年代―それは激動の時代であった。近代の日本の歴史において政治的社会的そして文学的にもめまぐるしい時代であった。文学の面からのみ、これをとらえていえば、大正時代の終り頃から社会主義運動が勃興し、昭和初年にはジャーナリズムを風靡し、昭和七、八年頃最悪の失業状態を経験した時、この運動は極端に頹廢化したのであった。平野謙は「昭和二十年間の文学をつらぬく特質はどこにあるか。『政治と文学』という問題を廻軸として、ただひとすぢに展開せられてゐること、そこに明治文学にも大正文学にもみることできぬ最大のメルクマールがある。そのやうな昭和文学史はちょうど昭和十一年ごろを境としてハッキリと前期と後期とに区分できる。」^(資三)と述べている。

伊東の京都帝国大学入学が大正十五年四月であり、彼の処女詩集「わがひとに与ふる哀歌」の出版が昭和十年であることを考える

と、この激動の十年間と詩業の胚胎期の十年間が重っていることがわかる。

昭和初年代における知識人の苦悩を如実に示す事件は、昭和二年の芥川竜之介の自殺である。激しい社会的現実の胎動の外に自らの芸術を構え、芸術至上主義の頂点を極めようとしながらもその近代的知性のめざめをうながそうとする逞しい時代の流れに抗しきれず、凄惨な苦悶と敗北感の中にその一生を閉じた芥川竜之介。彼の死については吉本隆明のように徹頭徹尾自己の出身コンプレックスからとらえ、「時代思想的な死ではなかった。」と、とらえるいきかたもあるが、彼の死が与えた影響は、はるかに芥川個人を越えているのである。三好行雄のいうところの「彼の死はとりわけ若い知識者階級に大きな衝撃を与えた。」のは当時二二才だった井上良雄、宮本顕治の芥川の死のとらえ方をみてみればよくわかる。井上も宮本も芥川の自殺を「自分のもの」としてとらえ、芥川の到達点を自己の出発点としているのである。明治三十九年生れ、当時二三才の伊東も彼ら二人と同世代に属し、同じ立脚点にたつものである。

伊東は芥川を師であった頼原退蔵を通じて間接的に知っていた。芥川は頼原の著「蕪村全集」に序文を寄せているのである。それだけに伊東の芥川に関する関心は強かったものと思われる。京都帝国大学卒業の年、昭和四年に師に宛てた手紙で伊東は芥川を読みながら自然主義的な個人主義の根強さに驚いて、過去の大正的な教養主義が役にたたないと嘆いている。そしてそういう自分にある「芥川の傾向」を克服しようとする態度は、井上良雄、宮本顕治と同じく時代意識を反映したものであった。この「芥川の傾向」とは「本から現実へ」（「大專寺信輔の半生」）つまり観念より行動が真理

であることを知りつつ、それが常に憧れの段階にとどまっていることを示すが、それは伊東においても井上、宮本においてもいちようにいえることであり、それが彼らの出発点であった。

では、社会主義運動へ身を呈することもなかった芥川を出発点とした伊東の、この運動への態度はどうであつたらうか。

伊東の最も古い社会主義運動への関心を語る書簡は、大正十五年一月十五日に治安維持法が最初に適用された京大事件について述べたものである。これにはまだ社会主義運動全体の意義を深く究めようとする態度はみられない。ところが昭和二年になると次のような意味深長な手紙がでてくる。

「世の中がひどく退くつになるようです。淋しさはどうやら退却しましたけど、一層悪い退くつという魔物が私の胸に這いよって来たらしうございます。青年らしい目のかがやきも自然と曇って行くのが自分でもわかる様です。大変危険な思想の変転期に立ってゐるのですね。」

伊東のここでいう「大変な思想の変転期」とは、大正的個人主義から時代の要求に従つて出現した社会主義運動へ真剣に目を向けざるを得なかったことである。それは、伊東がこの書簡の前後に親鸞や法然の他力の教えに苦しみの解脱を求め「自然に参入すること」、つまり、社会主義運動への行動と観念の相克に悩んでいたことから想像できる。

昭和四年住吉中学に就職後ほどなく彼には、唯物史観に真剣にとりくむ態度がみえてくる。大阪一のブルジョア中学で伊東は「乞食」とのニックネームにも平然としていたさうであるが、ブルジョアの気風の満ちていたこの学校で決して上層階級出身とはいえぬ伊

東が、社会主義思想に強力にひかれていったことは当然のことである。そして更には小高根二郎のいう如く、伊東の生家の没落も一層彼を社会主義の研究へ赴かせたのである。就職した年の六月には「戦旗」を読みだし「朝にタルマルクス、マルクスと考えてゐる」私の目下の仕事は、ともすると私の上におひかぶさりさうになる虚無的な影を追ひ払つて社会的熱情へ一途にならうと努力することです。」とまで言っている。小高根二郎によると伊東は、マルクスの「ドイツ・イデオロギー」から「共産党宣言」さらに「資本論」の剰余価値学説まで読破していたらしいし、凡庸な共産党員など及びもつかぬ知識を蓄積していたさうである。だが伊東は社会主義の勉強をし、その理解力は人並みはずれた位であつたとしても結局は観念としてしかとらえることができなかったのである。行動には彼は遂に走れなかつたのである。そのことは昭和四年の親友宮本新治宛ての書簡で暴露する。頭では唯物史観を信じても熱情なしに理解した時、虚無を感じるというのである。伊東における「バザーロフの亡霊」即生来のニヒリズムと懐疑主義の傾向の故に伊東は「芥川の傾向」からぬけ出して、社会主義理論に基く行動にはついにおもむかなかつたのである。彼においては、「芥川の傾向」を徹底的に克服することはできなかったのである。その証拠に彼はこの手紙の出される十日前に「私はしばらく芥川をよしてチェホフの研究を続けたいと思います。」と宣言しているのである。

伊東が社会主義運動への実践と観念の相克に悩んでいた時、時を同じくして彼には悲恋という体験があつた。これは小高根二郎が詳しく説いているが、相手は酒井ゆり子。伊東と郷里を同じくし、佐高の教授でもあつた酒井小太郎の二女である。大学時代下宿住いを

していた伊東は姫路の酒井家で正月を迎えたり、精神の疲れを感じたりすると酒井家に赴いて安代、ゆり子の姉妹と時を過ごしたのであった。「わがひととに与ふる哀歌」の「わがひと」もゆり子に他ならないのであるが、当のゆり子の方は伊東の親友、宮本新治に心を傾けていたことは小高根二郎の「伊東静雄の悲恋と実証」に詳しい。

この大学入学以来彼の結婚に及ぶまでの（大正十五年より昭和七年まで）長い悲恋は、恋愛においても実践と観念の分離をきたし、終始片思いであったことにより観念の世界の恋愛に終わったのである。

時代的な運動であった社会主義運動にも観念の上での興味にとどまり実生活における恋愛も相愛というより片思いに終わった時、伊東に残されていたのは孤独の世界であったのである。時代の流れそのものは肯定できても社会主義運動にも参加できずのう／＼と教員生活をしている伊東。対社会的にも隔絶され、心に思う人からも慰藉されなかった時、伊東が孤独に陥らなかつたとは誰も断言はできない。但し、伊東はそういったいわば後天的ともいえる孤独の意識の外に生来的ともいえる孤独感を身につけていた節がうかがわれる。饗庭孝男は「彼は幼少の時に、世界内存在としての自己の孤独を深く体験している。彼がそれを『煉獄』という呼び方で語っていることは、その原体験の深さを何よりもよく物語るものであろう。」と述べ、「山科の馬場」を引証として引いている。ここに表われているのは存在の恐怖であり、恐ろしい程の孤独感である。

前記した井上は、閉塞された時代の中でキリスト教の世界に入った。又、宮本は「敗北の文学」発表後「プロレタリア文化連盟」で

活躍したり、小林多喜二と共に地下に潜入したりして直接社会主義運動の中に身を投じた。主義主張の世界にも入れず、恋愛にも破れ、幼い頃、孤独の「煉獄」を体験した伊東は孤独という世界に身を置くより他はなかつたのである。その孤独の特性は、

「相愛わらずの懷疑的精神で苦しんでいます。懷疑主義者の悲劇は然し、彼が信じ込みやすい点にあるのですな。」

という懷疑的精神から事物をとらえ、認識が実践に至らないという悲劇の意識が常に伊東の内部にはねかえってくるものであったのである。一般の人においても行動と観念の分離はあるものであるが、伊東の場合は余りにまともに行動を希求した結果としての分離であったので、その孤独の深さも相当なものであったといえる。

詩人、伊東静雄の悲劇―それは孤独性故のものであったし、昭和初年代という激動の世代を生き抜いた人の悲劇でもあった。

2. 物の見方による悲劇性

伊東が孤独に陥りその孤独性故の悲劇があることを前述した。しかし彼の「わがひととに与ふる哀歌」が出版されるまでの悲劇性といったものは勿論時代の影響も多くうけ悲恋などの影響もうけているけれど、その根本にあるのは自分が痛み、傷つけられたと思わねばならなかつた事物への態度があるのではなかるうか。事物への接し方が悲劇的であつたところに悲劇的詩が生れ、悲劇的見方をするが故に彼のイロニーとしての抒情はあり、彼が詩人であつた所以もあるのではなかるうか。伊東が孤独の中で外界との接触面をイロニーで表現していることは前に述べたが、イロニーという表現形態を取つた事実、それは時代性を越えて人間性にまでかかわるものではなかるうか。

伊東の物の見方を如実に示す書簡は次にかかげるものである。

「百合子さん、安代さん。ほんたうに、さう思ひますね、自分の境遇から（それが楽しいものにせよ、苦しいものにせよ）新しい生命と力とを拾ひあげ得ない人は不幸ですね。あきらめよとは云はない。只その境遇に光をもたらず様に努力し得ない人は不幸です。」

と述べた同じ書簡で国木田独歩の詩「はたけのある所には人が住む／人の住む所には恋がある。」（独歩吟所収）をあげ「私は又その後の所に『そこには又必ず悲劇がある』とつけ加えたい。」と語っているのはそのことをはっきりと示しているのである。

伊東には時代が暗ければ暗い程明るくしようという意志があった。しかし意志はあっても人生の底に流れている悲劇が心から離れなかつたのである。この書簡は彼がまだ悲恋の体験もしない時に書かれてることからして、彼の心底には常に悲劇的物の見方があったとしてもいいだろう。

「近頃の私的の生活に大きな象徴となっている言葉はバルザックの『人間喜劇』という有名な表題。」

人生の悲劇性を知っていた伊東は自らの悲劇的ものの見方を転じさせるために「人間悲劇」を「人間喜劇」に転化させようとはかつたのではなからうか。自らの理性の力により悲劇的見方を喜劇にしようとしたのではなからうか。

「わがひとに与ふる哀歌」の悲劇性は、透徹者としての悲劇性であったが、この悲劇性は、前述した孤独の意識故の悲劇性と伊東自身の物の見方からくる悲劇性が、相まって成立したものである。

結 び

伊東の詩は勿論、昭和詩史においても厳然とした足跡を残すものである。

「現代詩の系譜は藤村に発し朔太郎を経て静雄に留るのである。」小高根二郎は確信を以てこう述べている。井上靖も又「伊東の詩集はいずれも日本の現代詩の中に不滅の光も放つもので既に古典としての価値をもっている」と述べている。私も勿論それに異論はないが私はそういった詩、そのものだけを評価するよりもっと「人間、伊東静雄」をとらえることに興味を感じている。その意味では「わがひとに与ふる哀歌」を悲劇性という限られた観点からのみとらえたことに大きな不満を感じている私である。

（卒業論文「わがひとに与ふる哀歌論」より）

資一、「伊東静雄全集」（全一卷）

人文書院

資二、「伊東静雄詩集」（解説）桑原武夫

新潮文庫

資三、「戦後文芸評論」平野 謙

青木書店